



# あさまびと

vol.08 2019 春号

特集：草軽電鉄で文明開化！



▲ ジオガイドと行く 浅間牧場散策（現在）  
ゴールデンウィーク中毎日浅間牧場散策ジオツアーを開催しています。興味のある方は是非参加してみませんか。

レンゲツツジが咲き乱れる  
浅間牧場（戦前）



写真提供：黒岩薫氏

【旧草軽電鉄跡地散策ジオツアー】  
旧草軽電鉄跡地散策ジオツアーの参加者を募集しています。当時の貴重な話を聞くチャンスです。詳細は中面をご参照ください。

## 浅間牧場今昔物語

北軽井沢の発展のきっかけとなった場所が浅間牧場です。明治時代に放牧場として開設され、時代とともに馬から牛へと放牧の対象が変わっていきました。大正時代に入ると、草軽鉄道の開通と共にこの地域の開拓が行われ、避暑地となり、大学村が出来るなど、観光地化が進んで行くことになりました。レンゲツツジの群落でもあった牧場には観光客がたたくさん訪れ、赤い絨毯を楽しむ光景が毎年のようにこの地を賑わしました。現在は残念ながら草軽電鉄は廃線となってしまい、昔の賑わいは名残でしか感じることが出来なくなっています。宝探しのような楽しみ方が出来ると思いませんか。

また、この広大な土地と、素晴らしい景色を望むことの出来る浅間牧場は、カラー映画の発祥の地にもなりました。見る場所、見る季節、見る人によってそれぞれの楽しみ方の出来る、まさに一見の価値のある場所を訪れてみませんか。

## ジオジオ豆知識 vol.7

### 浅間高原らしい鳥

浅間山麓は、「日本三大野鳥生息地」の一つといわれた昭和初期ほど鳥が多くありませんが、各地で鳥が減った今だからこそ、この地を特徴づける鳥もいます。

コサメビタキという、地味ながら目がパッチリ可愛い小鳥。かつて東京郊外にもいましたが、経済成長の陰で姿を消し、中西悟堂さんのような昭和の愛鳥家はとても嘆いておられました。この鳥は、河畔林のハルニレなどの横枝に巣を作り、カゲロウなどの水生昆虫が羽化して舞うのを宙で捕らえ、ヒナを育てます。なので、湧水が網の目のように張り巡らされた王領地の森など、浅間山北麓では今もよく見られます。



コサメビタキとウリカエデの花

この鳥は4～5月に南から渡ってきます。日本の初夏は、はるばる東南アジアから渡ってくる価値があるほど、昆虫が爆発的に発生するので、それで子育てをします。巣立った若鳥も秋には南へ渡りますが、翌春、生まれ故郷の浅間高原に戻ってきます。

ただ、人の視線をカラスが見ていると気づき、巣を襲うことがあります。カラスが卵やヒナを食べるのは自然なことですが、人がそこに関わらないことが、さらなる自然です。巣を見つけても、チラ見程度にとどめておきましょう。

解説：石塚 徹  
(万座しぜん情報館館長)

## My GEO STORY vol.7

長谷部 武さん  
(宿泊業・テレマークスキー指導員)

定住を決意してこの春から宿泊施設を開業する長谷部さんは、浅間の裾野に住んでもう20年余になる。取材当日もスキー場で都会の小学生のレッスンで多忙中でしたが、木島平でテレマークスキーの指導員を始めてから30年のレスプロで、優しい物腰ながら的確な指導が好評で指名されることも多くなった。婦恋に移り住んだのは20年ほど前。父が持っていた山荘を拠点に周囲の山々を滑り生徒が増えた。スキーで知り合った妻とパンとコーヒーの店「六花」を北軽近くに開業すると、以前にキャベツ農家で働いたこともあって地元の知り合いから野菜がいっぱい届いた。たくさんの人に支えられて不自由は感じなかったですね、と話し、夫婦して「この自然で、冬が一番きれいで好きです」とおらかな口調で語る。でも、将来を考えてこの春から宿泊施設を開業することになった。2家族が宿泊できる



ゲストルームを持つ家が完成し、認可も降りて準備に忙しい日々が続いているのかと思えば、本人たちは慌てる様子もなく、まだパンフレットもない(笑)。昨年、地元のことをもっと知ろうと、二人してジオパークガイド講習会に参加して幅を広げた。都会には無い山麓のゆったりとした時間の流れが二人にピッタリ合っているようです。



## イベント情報・活動報告

- 3月上旬～4月上旬 ガイド養成講座
- 4月 1日(月) 浅間園 平成31年度オープン
- 4月11日(木) ジオカフェ
- 5月中旬～6月上旬 浅間高原しゃくなげ園まつり
- 6月中旬～7月上旬 湯の丸高原つつじ祭り



【ジオパークフォーラム】  
第3回浅間山北麓ジオパークフォーラムを開催しました。生のガイドのお話や連携大学の研究発表など普段はあまり聞くことの出来ない内容がたくさんあり、有意義な時間となりました。今後も頑張っていきます！



【ジオカフェ】  
1月16日(水)第2回「お正月とジオパーク」、2月7日(木)第3回「レンジャーが語る！国立公園とジオパーク」を開催しました。どちらもたくさんの方の交流の場となり、楽しくお話をすることが出来ました。

発行元：浅間山ジオパーク推進協議会  
Mt.Asama Geopark Promotion Council  
〒377-1524 群馬県吾妻郡嬭恋村鎌原 494-45  
TEL/FAX : 0279-82-5566  
URL : www.mtasama.com  
E-mail : asama-geo@ebony.plala.or.jp  
Facebook : www.facebook.com/asamageopark  
制作担当：広報・観光委員会

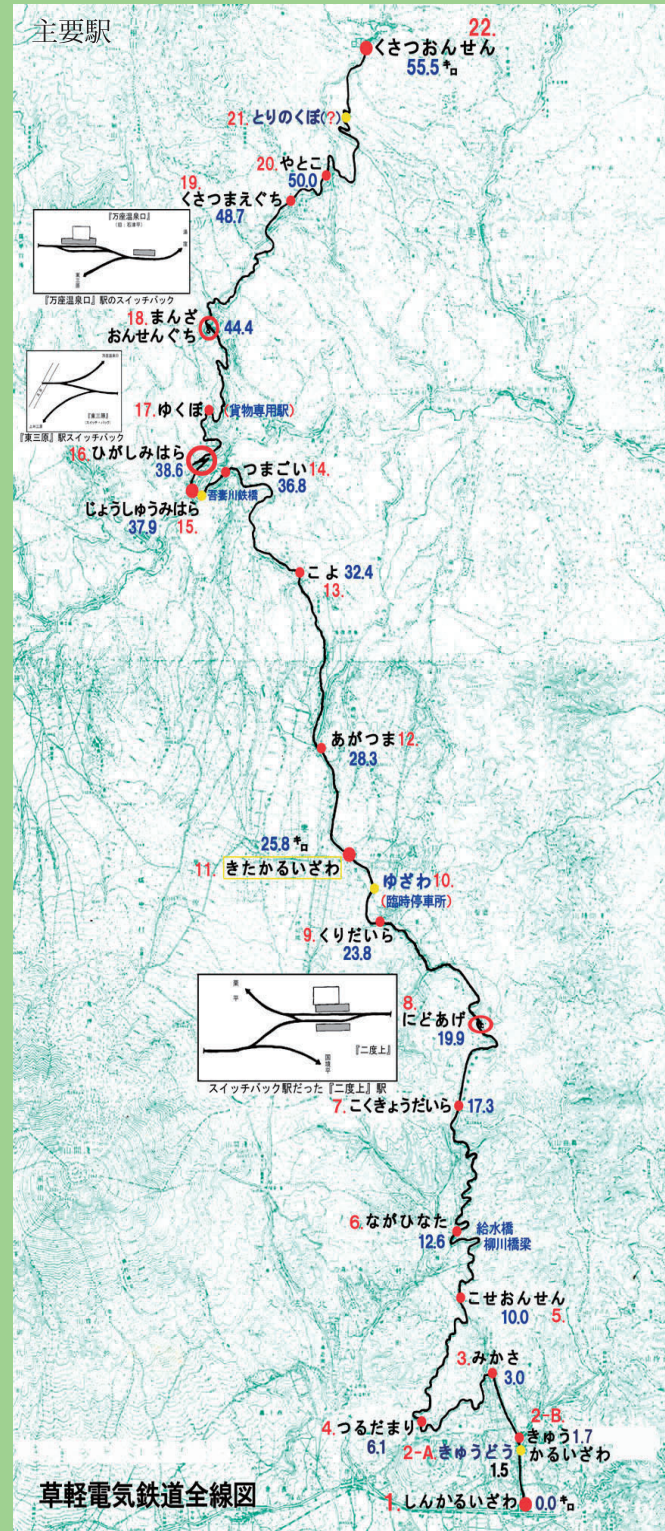
ガイド案内の受付をしています  
「浅間山北麓ジオパークガイドの会」の認定ジオガイドによる案内(有料)の受付をしております。ご希望の方は、左記、推進協議会事務局までお申し込みください。  
【料金表：ジオガイド1人あたり】  
半日：¥5,000～8,000 ジオガイド1人につき  
一日：¥10,000～16,000 15名までガイド可

編集後記  
草軽電鉄が出来た当時の記事を書くとき時代の流れは早いなど感じ、今だからこそ残ってればよかったと思える物もあり、自分たちは何を残していけばいいのだろうかと考えさせられた。



# 草軽鉄道で文明開化！

開通でここが変わった！！



～～～草軽鉄道って？～～～



【ススキと浅間山をバックに】  
大正2年(1913年)、草津、長野原、嬭恋、軽井沢を結ぶ沿線の旅客輸送及び物資、木材、薪炭、硫黄等の貨物輸送のため着工された草軽電鉄は、大正4年、新軽井沢～小瀬温泉間の約10Kmが開通しました。当初、客車・貨物車を引っ張っていたのは小型蒸気機関車でしたが、大正15年電気機関車に替わっていきました。電化されていく中で、高く突き出たパンタグラフを持つ「デキ12型」は、「カブトムシ」の愛称で広く鉄道ファンに親しまれ、昭和37年(1962年)廃線されるまでの38年間走り続けました。



【歴史を語る北軽井沢駅舎】  
大正6年(1917年)小瀬温泉～吾妻間が開通し、その後、嬭恋、草津前口と路線は伸びて行き、大正15年草津温泉までの55.5Km全線が開通しました。全線間の駅も徐々に増えて行き、最終的に22の駅が設けられました。ほぼ中間地点に位置する地藏川停車場は、昭和3年(1928年)この地区に法政大学村が開村されたことに伴い、翌昭和4年～5年に法政大学が駅舎を新設、寄贈し、駅名が北軽井沢と改められ、多くの乗降客で賑わいました。和洋折衷で斬新なデザインの正面玄関の欄間には、法政大学の「H」の文字が白く並んでいます。当時の全容を留める唯一の駅舎であることから、国の有形文化財として一般に開放されています。

～～～

明治政府からの本鉄道設置許可書には、時速12.8kmを超えない事とされており、風光明媚な景色を堪能しながらゆっくり、のんびりと走ることを求められていたのだと思われます。実際は平地で時速20～25km下り坂でも時速40km程でした。急な坂はスイッチバックで登って行くため、乗客が降りて用をたして走ってまた乗る姿が見られました。たびたび脱線したが、乗客も手伝って線路を動かして5分程で修復し、何もなかったように定刻で到着したそうです。自動車の普及、吾妻線の開通、台風による2度にわたる吾妻川橋脚の流失等で草軽電鉄は存続が困難となり、昭和34年(1959年)新軽井沢～上州三原間の廃止、昭和36年に上州三原～草津温泉間の廃止が決定され、翌昭和37年に全線の撤去が完了しその役割を終えました。



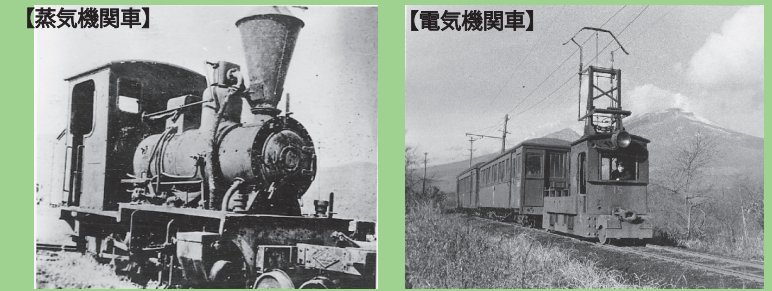
## ◆旧態依然の生活が変わる◆

明治の改革の中で、高崎・横川間には明治18年に鉄道を開設。直江津・軽井沢間にも明治21年には鉄道が開通して交通の近代化が進み、明治26年に残りの横川・軽井沢間が開通し全線開通すると沿線は生活も大きく変わっていきました。しかし北国街道の脇往還として栄えた浅間北麓の村々は、明治の近代化の中で取り残されたように旧態依然の暮らしが続いていました。軽井沢から草津温泉に来るお客の馬による輸送がにわかに活発になる程度でしたから、大正6年、軽井沢からの草軽電車工事が浅間高原の吾妻駅まで開通すると、西吾妻に文化や生活の近代化をもたらされるようになりました。



## ◆蒸気機関車が来て、電気が来た◆

大正8年11月7日に石炭を焚いた蒸気機関車ができたての嬭恋駅(芦生田)にシュッシュポップと到着しました。ここまで線路が敷かれ終着駅が伸びてきました。そして吾妻川に水力発電所の建設が始まり、その建築資材はこの蒸気機関車が運んできました。大正14年11月今井発電所が完成し、電気が家庭に届けられ、ランプから明るい光の電灯の生活になりました。草軽軽便鉄道もこの電気を使い電気機関車が走るようになりました。



## ◆浅間山北麓を支え大活躍◆

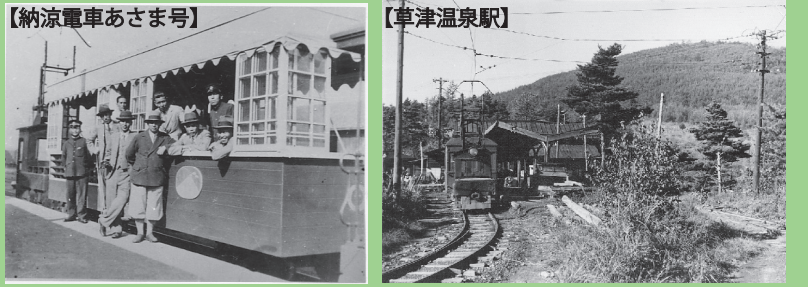
浅間山北麓は戦国の武田、真田の時代から南木山と呼ばれ、御林もあり豊かな林や森であり、木材が豊富でした。鉄道が敷かれたことで、この木材が炭、薪、建築資材として吾妻駅や栗平駅から首都圏へ送られました。吾妻駅には与志本(吉本)林業が棧敷山まで軌道を造り、木材を本格的に搬出しました。関東大震災や戦後の復興に寄与しました。そして、北麓地域と他地域を結ぶ唯一の交通でもあり、文豪、温泉客、別荘客と多くの人がこの地域に訪れました。また、生活物資や文化が入ってきました。北麓の人々も他所へ出かけるときに頻りに利用し、修学旅行や出征兵士も見送った地域の大動脈でありました。

## ◆硫黄を運ぶ◆

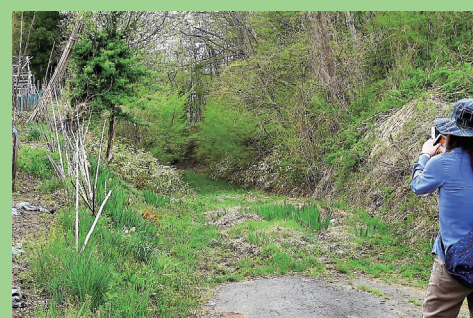
白根山周辺の硫黄も戦国時代から知られており、横浜開港の功労者中居屋重兵衛は白根山の硫黄を使い火薬を製造し、集要砲薬新書を出版しました。大正になり鉄道が敷かれ、嬭恋駅ができると吾妻山から鉄索で硫黄が運ばれてきました。草津温泉まで鉄道が延長されると湯窪駅、万座温泉口駅、前口駅、谷所駅から硫黄が搬出されました。戦後、硫黄は黄色いダイヤとも言われるようになり、駅には製錬された黄色い硫黄の塊が山積みになり、貨車に積まれて信越本線の軽井沢駅に運ばれ、北麓地域の経済を支えました。

## ◆高原が観光地に◆

明治40年、広大な浅間牧場が一括して東京の弁護士松本隆治らに払い下げられると、草津の旅館と連携して軽便鉄道の建設に着手しています。浅間牧場に咲くレンゲツツジは100万株ともいわれ、シーズには多くの人々が訪れる観光地になりました。北軽井沢には大正12年に一匡村別荘地ができ、昭和2年には大学村が造られて今日の別荘地に繋がっています。また、大正11年、奇岩鬼押出しは「熔岩溪」として観光開発が始まりました。広大な浅間牧場は日本で最初のカラー映画の舞台になるなど、草軽電車によって広く知れ渡り観光地化が進みました。



## 【旧草軽電鉄跡地散策ジオツアー】～参加者募集～



- ◆旧草軽電鉄の跡地をジオガイドの案内で散策してみませんか？当時の生の話を廃線を歩きながら聞くことができるまたとないチャンスです。草軽電鉄が出来て何が起り、何が変わったのか、この紙面では語りきれなかったものもたくさん聞くことができます！
- ◆日付：4月27日(土)  
時間：9時～12時(集合は30分前から)  
集合場所：北軽井沢観光協会  
人数：30名  
参加費：1,000円  
申込み：裏面下部、浅間山ジオパーク推進協議会事務局まで

写真提供：黒岩薫氏

写真提供：黒岩薫氏